

JASIS

NEWS

No. 63

2019/3/10

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

大会の中で考えたこと

学会長 直井英雄（東京理科大学）

本年度の大会は関東支部が担当でした。天候にも恵まれ、すべての行事が滞りなく執り行われました。本大会では、学会長の私が大会長も兼ねましたが、実質的な運営を担ってくださったのは実行委員長である関東支部長の内田和彦さんと実行委員の皆様、それと協力学生の諸君です。皆様、本当にありがとうございました。

さて、この大会に参加して、私個人が例年とやや違った興味を覚えたのは、見学会と卒業作品展でした。

まず、見学会ですが、東京での開催にふさわしい見学会対象ということで、「LINE office」と「LIFORK大手町」という最先端のオフィスを見せていただきました。確かに私なぞが見慣れてきたオフィス空間とは趣きが一変していました。ルーティーンを効率よくこなす空間から創造性を発揮させる空間への変化。かなりなショックを受けました。また、見学会の最後に、最近のオフィス事情を話してくださった岸本さんから聞いた「触媒空間」という言葉にも、ビビッときました。私には初めて聞く言葉だったのですが、聞いた瞬間、いい言葉だと直感したのです。オフィス空間に限らず、われわれの対象とするインテリア空間というのは、確かに、人の行動を促す「触媒」としての機能がその本質なのかもしれませんよね。

さて次の日、卒業作品展の会場で作品の審査をしながら、今度は「インテリアの領域」について再び考えさせられました。再びというのは、つい先日発行された本学会編「63人のインテリア論」で、論文審査に際しての私の自身の体験にもとづいて、「インテリアの学問領域につ

いて改めて考えたこと」という文を寄稿したからです。

展示作品は、それぞれの教育機関から推薦されただけあって、どれも力のある作品ばかりなのですが、私が改めて強く感じたのは、その多様性です。まさにこれこそインテリア空間というべき作品から、家具などインテリアの構成要素を扱った作品、また、都市空間内に人の居場所をつくらうとする作品にいたるまで、実に多様なのです。それらを審査しながら、ふと、見る人の中には、都市空間までをインテリアの領域とってよいのか疑問に感じる方がいてもおかしくないなと思ったのです。

私自身は、人とその生活を内包する構築空間は、屋根があろうとなかろうと、すべてインテリア空間とってよいと考えていますので、当然これらの作品もすべて審査対象になると考えています。しかし、異なる考え方があってもおかしくないし、学会であるからには、それも否定すべきではないと思います。そこで、私が若い方たちにぜひとも言いたいのは、研究論文であれ、卒業作品であれ、インテリア学会に出すものである以上は、それがインテリアの領域に属するものであることを作者自身ははっきりと表明し、必要があれば堂々と主張すべきではないかということなのです。若い方々、ぜひ自信を持って活躍をしていってください。

■日本インテリア学会 第30回大会（東京） 研究発表講評

□A 論文発表部門

【住生活Ⅰ】 001～005

座長：清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）

001 災害時における一時避難所の居住環境改善を目指

した、木材と鉄材を用いたパネルの組み立てによる間仕切りユニットに関する報告である。試作を重ねて提案された三畳間三室を基準とするユニットとその接合方法や必要部材表が示されている。災害に備えた材料の備蓄数と場所の確保、床のクッション性や温湿度環境などさらに進んだ居住性の改善など、今後のさらなる発展が期待される。

002 広島県尾道市因島重井町新開に建つ大出邸に関する調査報告である。瀬戸内海地域の農家に着目し、さらに海との関わりの視点を持って分析することが、本研究と既往研究との異なる視点であり興味深い。質疑において本報の分析の視座が、建築計画的または建築史的アプローチのいずれにあるのかが不明瞭で、考察内容が発散しているとの指摘があった。今後、各着目点ごとに考察を重ね、大出邸や重井集落の農家の特徴が明らかとされることが期待される。

003 本研究は、住まいの絵本館の蔵書約1700冊を対象とし、絵本の中に描かれる住宅やインテリア、空間による「意味の表現」について考察している。意味の表現をさらに「自己表現」「絆」「居場所」の3つに分類し、それぞれ初版本の出版年代や出版国、社会背景を考慮してその変遷を丹念に分析した結果、住まいの絵本の中のインテリアには、視覚的なデザインとしての「室礼の表現」や「生活の表現」だけでなく、「意味の表現」が取り入れられていることが明らかとされた。

004 住宅において就寝と勉強の場所をどのように個室に移行させてきたかについて、大学生のレポート記述より詳細なデータ分析を行った研究である。個室への就寝の移行は小学校高学年で男女ともに5割を超え、個室への勉強の移行は女性の方が早く、男性が5割を超えるのは中学生になってからであり就寝より移行が遅いこと、就寝と勉強で個室への移行の時期が一致しない例も多いことなどが把握された。また、個々の意見の理由についても示されている。このように今後の住宅計画に有益な新たな知見が得られている。

005 インテリアに大きな影響を及ぼした住宅インフィル開発に纏わる情報を埋もれさせることなく、特にインフィル創成期に住生活の近代化、洋風化のために工業生産されたインフィル製品の開発の文脈について記録することが本研究の目的である。その1と題した本報では、木質化粧合板仕上げ材及びユニットバスの商品開発担当者のオーラルヒストリーをまとめ、それぞれの開発背景が明らかとされた。今後さらに、システムキッチンなど様々なインフィル製品について同様に調査を進め、住宅インテリア発展史としてまとめられることが期待される。

【住生活Ⅱ】 006~010

座長：平田圭子（広島工業大学）

006 平成生まれの自炊学生たちが、電子レンジや冷凍冷蔵庫などに囲まれた生活環境の中で、キッチンをどのように捉え、どのように使っているかの意識調査である。被験者は、千葉工業大学工学部・千葉県立保健医療大学の千葉地域の自炊学生と、金沢学院大学芸術学部の石川地域の自炊学生の比較である。2地域の違いによる主な料理や食材の購入回数、購入金額、調理時間などの結果を考察している。時代の変化による自炊学生の意識調査自体の結果は興味深い。今後、自炊の定義を明確にし、工学部学生と芸術学部学生の学部の違いによる考察、大学の立地場所の違いも含めた考察をするとより良いと思われる。

007 高齢者向けのコンパクトで動きやすいダイニングキッチンの実現を目指して、ダイニングキッチンにおける収納の研究開発の報告である。戸建住宅の管理が難しくなる高齢者が転居を考える時に、コンパクトなダイニングキッチンのマンションや施設などは需要があると思われる。継続される研究だと思うが、アンケート中で「収納などで不便に感じること」についての質問で、<どこに何を置いたかを忘れ、よく探し物をしている>の項目が75歳以上の男性の一番多い比率になっている。<片付けや整理整頓が行き届かない>の項目も75歳以上の女性が一番多い比率にもなっている。この結果の解決策も含めて、今後の研究を期待したい。

008 美しくコーディネートしやすい住宅内装部材の提案（その7）として、日本の素材・技術を活用したキッチンの研究開発の報告である。①適正コストのデザイン、②デザインしすぎないデザイン、③誰もが使いやすいデザイン、④調和しやすいデザインの4点を基本条件としている。本報告では「色」「形」の調和を目指したキッチンとマテリアルパネルの説明と、「ミラノサローネ2018」の展示におけるインタビュー調査の結果が報告されている。発表時に見た「褐色（かちいろ）」や「破れ七宝」は美しい色と形であった。今後、基本条件とのすり合わせが期待される。インタビュー結果など、数値も含めて報告をしていただくと客観的に把握ができると思われる。

009 入浴に関わる生活実態やニーズの定量調査を、①入浴頻度・タイミング・方法の実態、②浴室の実態、③着脱衣空間の実態、④入浴後に身体を拭くものの実態で考察を行っている。調査対象者数も2,064人と多く、現状の浴生活を把握するのに大切な要素が沢山内在していると思われる。年齢や家族形態などの情報があるので、①~④とのクロス集計をすると、高齢者が求めるもの、今後の浴生活の新しい芽吹きなどが推察できるのではないだろうか。期待できる研究である。

010 009と連続した研究であり、ここでは洗面室と浴室の面積比の違いに関する空間体験による印象評価実験結果を考察している。実験はVRを使用し、2m×3.5mで浴室と洗面室の面積比が異なるA・B・Cの3つの浴室・洗面の仮想現実空間を評価している。結果は、浴室重視派であっても洗面室の広さを求めるBの結果となった。わかりやすい明快な研究であった。

【人間工学・教育】 011~015

座長：早野由美恵（東北芸術工科大学）

011（上野）男子用の機能寸法・形状に関する考察に関する発表であった。まずは小便器の実状を調査し、デザイン性の問題や尿の飛散や漏れ、掃除等の課題を取上げた。また、使用方法に関して、家庭や教育現場での指導がなされていないこと、つまり小用の一般化ができないことも原因のひとつとしていた。手洗器との一体化等あらたな機能や空間の設計からそれらの見直しに繋がる事を伝え、使用者側からの視点から小便器の設置方法、手荷物の有無、立ち位置や姿勢に関する調査結果の発表がなされた。男子小便器の使い勝手向上のためには排尿姿勢や人間工学の実験研究、トイレの教育が不可欠であるとした。

012（松村、早坂）は、最近多く市場に出回り、その効果も伝えられている低反発枕について行ったものである。それらは年齢や体の各部位を個別に対象とした場合、一般に謳われているところと異なるという報告もあり、低反発の粘性の低いタイプと粘性の高いタイプについて、20歳前後の健常者を被験者として使用時の印象度についてアンケート調査を行い、印象度や効能を考察したものであった。調査の方法は被験者が実際に一晩使用し、睡眠の質や身体への影響、素材感等のアンケートをSD法により分析したものであった。結果としては被験者にとっては粘性の強い低反発素材の枕は疲労感を軽減し、粘性の弱いそれは疲労感が増す傾向があった。発表後は現在使用している枕との比較も有効であるという意見もあった。

013（植松）は住まいのインテリア空間についてユニバーサルデザインの推移を、視覚視点・使用視点から、築1年、10年、48年の3棟の調査の報告を行った。3棟のうち築1年の物件は65歳以上の人の入居可能な日常生活の出来る健康な高齢者用の老人ホーム、築10年の物件は医療介護の受けられる駅直結型で2階から6階がシニア安心住宅の併設されている47階建てのタワーマンション、築47年の物件は当時最先端の分譲マンションで、今尚住み続けられているという。調査の内容は出入口、廊下、エレベーターの共有部分、各住戸部分の各室やスイッチやスプリンクラー、コンセント等に至る。築1年、10年のマンションは至るところに工夫が施されてい

るが、築48年のマンションが改良を行いながらも今でも住み続けられている現状とその理由を取り上げ、現在だけでなく未来を見据えて作ることの大切さを伝えていた。

014（松田、ペリー、鈴木）は、建築・住居系演習の課題製作に非専門家である企業の方に参加してもらうことで、学生の課題製作の過程における意識の変化と、作品に対する影響を調査し、それらの関連性について考察を行うとともに、教師陣と非専門家である一般の人たちの視点の相違を明らかにし、効果的な教育方法を探ろうというものであった。課題のテーマは「ひとり暮らしのインテリア」で大学3年生30名（男子24名、女子6名）、調査は課題製作過程において「自己と他者へ向けられた意識」「デザインで大切にしたこと」であった。結果としては、外部の評価が加わることにより見せ方や見られ方を意識する状況が生まれ、自己と他者に対する意識の待ち方は変化し作品への評価へも影響した。このことから、学生が社会との繋がりを実感しながら、評価者に異業種の人間が入る事により教育効果は高められるとした。発表後、外部の人間の授業への関わり方に関する質問があった。

015（金子）は、高等学校において必要性を謳われているキャリア教育は、インテリア教育に置いても必要な学習と考え、その指導方法、授業の実践の報告を行った。今回はコミュニケーション能力に焦点をあてた授業として「問答ゲーム」を行った。これは三森ゆりか著の「論理的に考える力をひきだす」に記載されているトレーニング方法を、発表者が高校生向けにアレンジしたものであり、生徒達に論理的な思考方法や発表の方法や様々な気付きを学ばせるというものであった。事後のアンケートから、生徒たちは人前で話すことに苦手意識が薄くなり、就職や大学等の面接試験にも効果を発揮したという効果が生じた。一方理由を述べることや相手の納得する答えを短時間で考える難しさの指摘もあった。教員としての留意点は、ゲームであることを認識させ、発言は否定せず出来た所を褒めるということであった。発表後、アクティブラーニングの視点から質問の方法に関する意見の交換がなされた。

【インテリアエレメント】 016~020

座長：橋田規子（芝浦工業大学）

このセッションでは、具体的な家具や、家具と人の関係性についての調査、研究に関する発表が行われた。

016「近江八幡吉田家住宅の家具」では戦前期の中流住宅「ヴォーリズ住宅」で使われていた家具を対象に調査したもので、多種多様な家具があり、それぞれの特徴は微妙に異なるという結果である。

017「住宅設計における建築家の家具に対する意識」で

は、建築家自身が家具デザインを手掛ける場合と、施主に任せる場合があり、それぞれに様々なパターンがあることがわかった。ヒヤリングした細かい内容が興味深かった。

018 「テーブルの形状が利用者を与える心理的影響（その1）」ではテーブルや椅子の高さ、形状を変化させることによるコミュニケーションへの影響について実験を行い、知見を出したものである。テーブルの奥行き、高さ、テーブルカウンターの有無を変数とした実験と分析結果は丁寧にまとめられていた。今後の研究も期待したい。

019 「ソファの形状が利用者を与える心理的影響（その2）」ソファ間のテーブル、肘掛、袖ソファの有無について実験をおこなったものでそれぞれ人の心理や行為に影響があることがわかった。こちらも018と同様で今後の研究展開が楽しみである。

020 「インテリアエレメント（照明家具）に対する現代学生の嗜好調査・報告」では20代の学生が様々な照明器具の形態についてどのような嗜好を持つか調査したもので、和テイストとモダニズムの嗜好が強いことがわかり、若者の間でも嗜好はバラエティーに富んでいる様子がわかった。

【材料・各種施設】 021～024

座長：高橋正樹（文化学園大学）

021 本研究は、「畳店における畳の取扱いの現状と畳に対する意識」の続報である。全国の畳店へのアンケート調査の結果、畳表は現時点ではいぐさが主流であるが、化学畳表では和紙の導入が多かった。今後は、多様な色や柄が選べる和紙・樹脂の畳表の利用が広まるため、ユーザーがその特徴をきちんと把握した上で選択することが必要とのことである。

022 本研究は、病院の診察室の色環境をコントロールすることで、患者へのストレスを低減させる効果があるか被験者実験等を行った報告である。CGで作成した診察室を刺激とし、印象評価実験を行った結果、壁を緑色にすることで安心感やリラックス感を与え、医師と話しやすい雰囲気になる可能性のあることが示された。また、診察室の壁全面よりも一面に色を施す方が高い評価を得るとのことであった。

023 本研究は、全国の市庁舎を対象（166庁舎）に、2006年と2016-17年の2回にわたって実施されたアンケートを基に、市民空間の利用と運用について調査した結果の報告である。回答者は市庁舎管理部局担当者である。この約10年間で、管理運営の面においてより職員が目が行き届き安全性が担保しやすい市民空間が求められるようになったとのことである。

024 本研究は、大分空港の施設改善のため実際にサインシステムの見直しを行い、改修工事前後の視認性の変

化について言及した実証的調査研究である。最初に現状のサインのどこに問題があるかを把握し、その後サインの具体的な改変前後における視認性の変化についてアンケート調査による事前チェックを行った。その結果、おおむね改善されることが確認された。ただし、表示ルールを統一することで情報量の過多が生じ、わかりづらさが改善されないという課題も明らかになったとしている。

【室内環境・設備】 025～029

座長：木戸将人（旭化成ホームズ株式会社）

025 インテリアのスマート化の受容性を調査し、デザイン要件の枠組みの作成を試みた研究。スマート化の現状は安全・高齢者支援での活用が多いが、生活者・ユーザーがその進展についていけないことが課題で「何が必要か」を良く検討することが重要と指摘した。

026 超スマート社会を若者がどのように捉えているかをアンケート調査によりまとめた研究で、調査結果は肯定的な意見が3割、否定的な意見が1割、中間的な意見が約6割であった。スマート化によるメリット、デメリット両側面の考えを若者は抱いていることを指摘した。

027 働き方の変化が住まい手の意識や住まいへのニーズに影響・変化すると仮説立て、働き方に関する生活実態を調査した研究で、働く目的を働き方別にみた場合、男女差が大きくあること、また女性の方が男性に比べ仕事の満足度が総じて高いことを指摘している。

028 前報に続く研究で、自宅での働き方の実態と理想を中心に職場や自宅以外での実態についても明らかにしている。自宅で働く割合は全体で3割だが、希望は5割。結果に男女差、年齢差があることを指摘している。仕事をする場所に男女差がある結果は非常に興味深い。

029 トランスジェンダーを扱った社会性のあるテーマで、より配慮が必要なオフィストイレに着目し、その要件についてオフィスで働く男女の意識調査から探っている。トランスジェンダーへの理解は女性の方が男性に比べて高く、トイレ利用への理解は逆の結果が得られたことは興味深い。今後の発表に期待したい。

【子どもの環境】 030～033

座長：高月純子（女子美術大学）

030 本研究は一戸建て住宅を取得する世代に「育児中の親」が多いことに注目し、子ども（長子）が妊娠中から8歳までを持つ親を対象に、新居の計画意識を調査した。育児経験に伴って収納の必要意識が増し、子どもの数が不確定な場合は部屋数に余裕をもつ傾向がみられた。現段階では意識調査のみであるが、今後、入居時の想定と経年後の必要量との差を具体的な数値で整理する

事ができれば、育児という個人的経験が指標として共有されることが可能となる。人間のライフサイクルと向き合う、長寿命で質の良い住宅計画に貢献する発展を期待する。

031 本研究は0～3歳の乳幼児の寝室での睡眠スタイルに関する考察である。寝具、床材、同寝室か、家族の誰と寝るか、寝具の共用状況、就寝中の実態を年齢別に調査した。本来ベッドを置きたくても置けない理由は寝室の広さである事、寝具を共有の0～2歳児の場合、特に母親の睡眠が不安定である実情、ベッドでは転落の危険にヒヤッとした事が最も多い、等の報告があった。今後、考察を基に安全な添い寝を可能にするツール、乳幼児専用の寝具、ベッドから転落しても怪我をしない床材など具体的な提案の展開が楽しみである。

032 本研究は新駅の設置に伴う住環境の変化が小学生の遊び方に与える影響について、既存の農村地帯と新興住宅地を比較し、小学生約2,800名にヒアリングを行い、特性をまとめた調査報告である。既存と新興の差は、休日の遊び相手に祖父母が登場する違いが現れたのみで、他には性別、年齢別で遊びの種類の差がみられた。研究の背景であるつくばみらい市の環境整備に役立てる目的を踏まえると、自宅の室内の遊びに限定した今回の調査の範疇に、屋外の滞在と遊びを加えることが考えられる。知覚を培い原風景となる住環境の全体と、内面の表現である遊びの関係性を、インテリアと捉える展開に大いに期待したい。

033 本研究は子どもの外遊びの実態と意識についての東京と台北の親を対象としたアンケート調査報告である。東京の方が「自宅の近くに公園が多くある」、「自分の子どもは身体を動かす事が好き」の見解が多かったが、そのことから「自宅から公園への距離が、子どもを活発に遊ばせる重要な要因である」と報告をまとめた。ただし、現段階での結論付けが妥当とは思われないと会場で指摘があった。今後、都市の地域特性をより抽出して比較する必要がある、また親の要望・見解だけでなく子ども自身のヒアリングも取り入れ、実態とのずれが生じない検証と考察を発展させていきたい。

【地域・コミュニティ・その他】 034～038

座長：長尾 徹（千葉工業大学）

034 知多木綿で栄えた愛知県知多市岡田町にある長屋門を対象として商家の長屋門の空間としての特徴を見出すことを試みている。具体的には江戸時代からの木綿問屋であった中島七衛門を引き継いだ旧中七木綿本店長屋門の調査報告を行なっている。納得できる調査結果であると言える。最後にカフェとして活用する提案を行っているが、多少の飛躍を感じるとの質問もあり、再考の余地もあったかと思われる。

035 オープンガーデンを題材に行政が支援することでオープンガーデンを新規に始める・継続できる仕組みづくりの指針をあきらかにすることを試みている。三田市を対象として行政との関係性をモデル化した上で、三田グリーンネットの活動を調査し、行政主催の「三田まちなみガーデンショー」とグリーンネットが共催している「三田市オープンガーデン」について整理している。ケーススタディとしての調査報告である。他地域での調査など今後の展開に期待できる。

036 調査報告である。神戸乙仲通界隈における境界空間における「あふれ出し」に関する研究としてよくまとまっている。調査対象としたSビルディングの「あふれ出し」を宣伝広告・装飾・商品のカテゴリー別の定量調査を試みている。街路空間・共有空間による違い、店舗別の分析などわかりやすい説明がなされている。口頭発表梗概という紙面制約のため具体的事例の提示がなされていないのが残念だ。

037 既存共同住宅の共用部の維持管理の重要性について述べ、定期報告調査状況記録を維持管理に活かすことで、設計・施工・デザインにおける対策案の提言を試みた。具体的には2018年の大阪府北部地震の被害調査結果を分析し、特にエクспанジョイントについての変形損傷に関する対策案など4つの案を示している。実データに基づき、経験豊富な実務者の知見が示されたと思う。

038 甲子園ホテルという題材を基にした研究の一つであり、宴会場の空間構成と装飾の関係性を考察している。まず設計者である遠藤新の「異文化の尊重と世界平和を祈る独創的な空間表現」について述べている。装飾である「打ち出の小槌」、重層化された「水の流れ」、外部との連続性、無限の表現などの解釈が実例を基にわかりやすく解説されている。

【歴史】 039～043

座長：武田美恵（愛知工業大学）

039は、オーストリア出身でモダニズム運動の先駆者である建築家ヨーゼフ・フランクの制作活動の中でも中期から後期に至る空間思考について述べた研究である。主に1930年に竣工されたフランクの傑作とされる住宅作品「ヴィラ・ベア」のエッセイ「道と広場としての住宅」について紹介されている。家の計画における大変重要な要素である階段がどのようにデザインされるべきか述べられているが、階段は人を導くものであり、空間の節約ではなく連続的な案内に役立つもので、最も短い道は最も快適とは限らず、道の長さを実感しないようにしなければならない。また、道の先には広場となる居間がある。究極の良質な休息場所となる住宅を計画するには、いかに一つ一つの要素に心を砕かなければならないかを示してくれた研究報告であった。

040は、岐阜県長良にある紫雲山真龍寺茶室の建築的特徴や建設背景、その後の変遷について述べられている。哲学者久松真一が設計に関与したと伝えられる真龍寺茶室の実測調査により、地袋建具に樺の無垢板と皮革の引き手等の独自の材料が使用されていたことが確認され、設計者の趣向を知ることのできる興味深い内容が示されている。また、真龍寺茶室と久松に関係する他茶室を比較し、一致する要素、共通点を確認することができたものの、久松真一による設計を実証する事実や資料が得られなかったということであるが、今後の研究につながる貴重な情報がストックされたことは確かである。

041は、昭和戦前期百貨店の籐家具の特質について明らかにしている。籐家具の意匠、構造・材料、商材としての位置づけ、用途について詳細に分類、分析されている。籐という植物から表面模様だけでも8種類の編み方を編み出し、置きクッションの生地も11種使用している。こんなにもデザイン性豊かな家具であるとは知らず、あまり市場に出回っていないことに残念な気がした。原材料である籐は日本で生育しないため、原産地のフィリピン、インドネシアから輸入し、日本で制作されているとのことである。

042は、画家コロマン・モーザーと建築家ヨーゼフ・ホフマンの活動の接点について、各々の自伝、書簡、資料をもとに明らかにした研究である。二人は1903年に質の高いインテリアを供給する会社「ウィーン工房」を設立し、共通の活動領域として、独自の家具、工芸品、テキスタイルのデザインや、協働で住宅、店舗等の空間デザインを行っていた。モーザーが「ウィーン工房」を退いたことで二人の関係が疎遠になるまでのそれぞれの生涯、活動内容について細かく整理されており、大変貴重な知見となる。

043は、スペイン・カタルーニャのロマネスク教会について、2017年に発表された研究報告の続編である。スペイン・カタルーニャ州のピレネー山中に位置するアラン谷の教会群を、2014年、2016年、2017年に調査している。サン・アンドレウ聖堂、サンタ・マリア聖堂、サント・ペレ聖堂の様式、増築、改修、修復部分、装飾、意匠について時代とともに細かく調査、整理された貴重な記録であり、今後の研究の進展が期待される。

□B パネル発表部門

【設計提案】 044～046

座長：赤澤智津子（千葉工業大学）

パネル発表部門においては3件の発表があり、うち2件は「弾性スギ圧縮材」を扱った提案であった。

044 ブロックシェルフの開発は、弾性スギ圧縮木材の中心に木製丸棒材を貫通させた部材を支柱としてシェルフを制作、振動実験を行ったものである。地震被害が頻

発している昨今、素材の観点から問題解決をはかるユニークな研究である。ただ倒れにくいことに意味が見出される一定の高さや収納量を含めた検証が必要とされそうである。

045 平編み加工を施したスツールの開発は弾性スギ圧縮木材をリボン状にし平編みするアイデアであり、強度向上に不織布との組み合わせの有効性が確認され、今後の展開が期待される。

046 タケ材による中空構造シェルフは放置竹林という社会課題とタケの特性を活かした家具設計研究であり、今後外観形状も含め精度が上げれば商品化にも期待が持てる。いずれも素材に視点を置き課題解決を試みるユニークな研究発表であった。

■平成30年度日本インテリア学会 第2回理事会議事録

記録 松崎 元（千葉工業大学）

日時：平成30年10月21日（日）12:15～13:00

会場：千葉工業大学 津田沼7号館7408教室

出席者：直井、加藤、西出、上野、内田、江川、小澤、片山、金子、河田、河辺、小宮、白石、高月、谷川、長山、早野、平田、ペリー、棒田、松崎、松本、渡辺<23名>委任状2通
井上評議員（アーカイブ化委員会）

配布資料：

- 1) 平成30年度第2回理事会議事次第
- 2) 平成30年度役員（改訂）
- 3) 論文集・梗概集のアーカイブ化に関するご報告
- 4) 入退会者名簿（2018年6月17日～10月21日）
- 5) 平成29/30/31年度 理事・評議員・役員名簿（改訂）
- 6) 平成30年度第1回理事会議事録
- 7) 平成30年度通常総会議事録

議 事：

1. 開会宣言（白石）
2. 会長挨拶（直井会長）
3. 定足数の確認

本理事会の出席者は25名中23名で、理事会の成立に必要な定足数（過半数：会則17条）を満たしている（委任状2通）。

4. 前回議事録の確認（議事進行：直井）

・平成30年度第1回理事会議事録（資料6）および平成30年度通常総会議事録（資料7）の確認は割愛

し、資料1の次第に基づいて議事の進行を始めた。

5. 審議事項1：平成30年度組織変更について（白石）
 - ・学会組織図の運営部門内に「アーカイブ化委員会」を加えた改訂版（資料2）が承認された。委員会として銀行口座を作る際に必要となるため。
6. 審議事項2：論文集・梗概集アーカイブ化の報告について（小宮、井上）（資料3）
 - ・資料3に基づきアーカイブ化委員会の小宮理事、井上評議員から作業の進捗が報告された。
 - ・過去の論文集および梗概集が全て揃ったため、電子化の作業を進めている。
 - ・J-Stageで論文を閲覧できるようにするため、著作権の問題から、過去の著者に掲載の許諾を得る必要があり、他学会の情報を収集しながら、経験のある会員に協力を求める。
 - ・今後新規の論文掲載にあたっては、公開を希望しない場合に申し出を受けるなど、事前にその旨を記載する必要がある。
 - ・関連した連絡のため、事務局より理事のメールアドレスをアーカイブ化委員会に提供する。
7. 審議事項3：平成31年度大会開催場所について（白石）
 - ・中国・四国支部長の谷川理事より、次年度の大会は広島工業大学（2019年10月26日～27日）で開催される旨、報告があった。
 - ・見学会は、宮島、竹原、市内おりづるタワーなどを検討している。
8. 審議事項4：期限付き研究部会の公募について（西出）
 - ・昨年度の期限付き3研究部会は、継続して熱心に活動している。今年度は10月31日が締め切りで、すでに1件の応募が届いている。
 - ・今後は常設の部会も活動計画を提出して、運営することが望ましい。
9. 審議事項5：入退会者の承認について（白石）
 - ・資料4に基づいて、前回理事会以降の入退会者が承認された（入会：準会員9名、正会員12名、退会：準会員3名、正会員11名）。
 - ・会員数は下げ止まりつつあるが、引き続きインテリア分野の教育機関で、知人の教員などに入会を勧めていただきたい（直井）。
10. 審議事項6：論文審査委員会より（渡辺）
 - ・渡辺委員長より、論文審査委員会の委員変更の報告があった。直井会長、松本（直）評議員に替わり、村井裕樹（日本福祉大学）、高橋正樹（文化学園大学）両氏が加わる。
 - ・前回理事会で報告した通り、第3査読者制度が運用されている。
11. 審議事項7：その他
 - ・大会参加費について（白石）

これまで2,000円としてきた大会参加費を、大会実行委員会の判断で今回3,000円としたが、理事会で承認を得るべき事項であったため、次回からは2,000円に戻し、変更が必要な場合は事前に理事会で諮ることとする。
 - ・大会参加費決定経緯について（上野）

正会員が2,000円、非会員が4,000円（正会員の倍額）となる設定は、過去の理事会で議論を重ねて決定したもので、年会費と同様に重要な事項である。変更が必要となる場合は、総会時の理事会で大会前に承認を得なければならない。
 - ・正会員の減少傾向について（白石）

ここ数年減少傾向にあった正会員数は、今年度やや増加しているが、各支部、理事の皆様には引き続き協力をお願いする（資料4参照）。
 - ・評議員名簿について（白石）

湯本前評議員の退会により1名減となったが、会則では「100名以内」との規定のみであるため、評議員の追加措置は行わない。また、伏見評議員が中国・四国支部から関東支部に移籍したが、評議員はこのまま継続する。支部から選出される手続きをとっているが、選出後は学会全体の評議員となるため、支部からの繰り上げ措置等はとらない。
 - ・事務局の引継ぎについて（白石）

次年度から学会事務局が金沢（棒田理事）に移転するため、来年1月～3月に集中して業務の引き継ぎを行う。これまで7年間務めた押切事務局員に、本日の閉会式にて感謝状を授与する。
 - ・卒業作品展の表彰式について（高月）

今回大会の会場で開催されている第25回卒業作品展の表彰式を、巡回展の会場（タチカワブラインド銀座スペース オッテ）で行うかどうかについて意見が求められた。学会行事として大会の閉会式を正式な表彰式とし、会報とホームページで結果を公表することで、巡回展の会場では表彰式を行わない。
 - ・IDM TOKYO 2018のお知らせ（直井）

本学会が後援するIDM（Interior Design Meeting）のイベントが、11/30-12/2の会期で青山のスパイラルガーデンにて開催される。IDMは、インテリア関連団体による緩やかな組織体で、直井会長が有志として参加しており、学術団体としての立場を踏まえて可能な範囲で協力していく。詳細はホームページ等で確認いただきたい。

以上

■平成30年度委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

大会開催中に開かれました理事会の報告を簡単に致します。（詳細は理事会の議事録をご参照ください）まず、今回の理事会において、前回（6月16日）の理事会以降の入退会者が承認され、確定致しました。内訳ですが、入会者合計21名（準会員9名、正会員12名）、退会者合計14名（準会員3名、正会員11名）です。久しぶりに入会者数が増えました。会員数の減少は若干止まりつつありますが、本学会をより盛況にするためにも、引き続きインテリア分野の教育機関や企業関係者の方々に新規入会を勧めていただければ幸いです。

また、2019年度の大会について中国・四国支部長の谷川理事より、広島工業大学（2019年10月26日～27日）で開催される旨、報告がありました。来年も多くの方がご参加いただけることを期待しております。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

広報委員長として会報発行に携わり2年目になります。まだまだ右往左往する日々ですが、西岡先生、清水先生、松尾先生、小俣氏のご協力があったここまで続けられたものと感謝しております。また、編集・印刷には正文社の社員および長谷部氏のご協力なくして達成できなかったとも思っております。

新しい年を迎えました本年もよろしくお願ひいたします。

広報委員会の主な仕事としては学会に関わる事業の啓蒙にあると考えております。その啓蒙のひとつに会報があります。会報は年3回の発行をしております。発行別の内容としては春が総会・講演案内とインテリア講座、夏が総会報告と大会案内、冬が大会報告と講評となっております。しかしながら冬と春の発行間隔が大変短くなっており、会員の皆様にはご不便をおかけしております。誠に申し訳ございません。

これは、冬に掲載予定の大会報告に時間を要してしまい、報告原稿の提出が遅れることにあります。原稿は早くして12月上旬、遅いと12月末から1月中旬になることもあります。この原因として社会の急激な変化から仕事量が増えたこと、大会の実行委員長になる方の多数が初めての経験で、すべてを1人でつくらなければならないという現状です。解決策として、会報もそうなのですが、

大会報告も時間をかけずに必要な箇所のみ書けばよいフォーマットを用意する必要性を痛感しております。

次回の会報第64号は5月の発行を予定しております。

□国際委員会

支部長 ペリー史子（大阪産業大学）

今回はありません。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

2018年度の日本インテリア学会論文報告集29号については、9月末の応募締め切りまでに12編の投稿がありました。現在、査読をお願いしている段階です。応募していただいた会員の皆様、査読をしていただいた査読委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。来年度も多くの会員の皆様からの論文投稿をお待ちしております。

アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIAについては、本学会で審査をして採用となった1編の論文をAIDIA事務局に送付し、現在、AIDIA事務局で編集作業中です。例年通りとすれば、年度末には発行される予定です。応募していただいた会員の皆様、査読をしていただいた査読委員の皆様、AIDIA事務局との連絡ならびに事務手続きをしていただいた日本インテリア学会事務局の皆様にご礼申し上げます。

本学会の論文審査について、今後とも会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

□表彰委員会

卒業作品展担当 高月純子（女子美術大学）

◆日本インテリア学会 第30回大会

学生発表奨励賞 審査結果

- ・ **テーブルの形状が利用者に与える心理的影響**
一家具の寸法と形状に関する実験的研究 その1ー
千葉工業大学大学院
森 亮太（担当教員／橋本都子）
- ・ **弾性スギ圧縮木材による平編み加工を施したスツールの開発**
拓殖大学大学院
沢田信哉（担当教員／高木拓哉・阿部眞理・白石照美）

〈審査について〉

平成30年10月21日（日）に開催された第30回大会（関東・東京：千葉工業大学）当日の参加理事および各セッションの座長による投票の結果、9名の学生発表者（準会員）の中から、上記2名が学生発表奨励賞を受賞しました。

◆日本インテリア学会 第30回大会

第25回卒業作品展 審査結果

(出展学校42校/出展作品42作品)

【最優秀作品賞】(1点)

- ・住む人の日常をつくる不満レスな部屋づくり
ーワンルームマンションのリノベーションを通した
楽しい生活の研究ー
九州産業大学 工学部 住居・インテリア設計学科
江川詩乃

【優秀作品賞】(3点)

- ・Tutti (トゥッティ)
東京藝術大学 美術学部 デザイン科
高本夏実
- ・skyline tourism (スカイライン ツーリズム)
芝浦工業大学 デザイン工学部 デザイン工学科
建築空間デザイン領域
溝口実央
- ・Auberge Komorebi (オベルージュ こもれび)
フェリカ 建築&デザイン専門学校 インテリア設計科
空間デザインコース
村上実千留

【奨励賞/高等学校優秀賞】(1点)

- ・サークルベンチの製作
千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
岡村光希 小川瑞月 下野真弥 下野真侑
松原 空 茂木編莉 吉川美希

〈審査員〉

直井英雄 (審査委員長 日本インテリア学会 会長)

内田和彦 (第30回関東・東京大会実行委員長)

谷口久美子 (第30回関東・東京大会実行委員)

金子裕行 (日本インテリア学会 教育部会長)

高月純子 (日本インテリア学会 表彰委員会)

◆卒業作品の選抜と保管のお願い

次年度(2019年10月)「第31回日本インテリア学会大会」が広島にて開催される予定です。その折、開催予定の卒業作品展の卒業作品の選抜と保管をお願いいたします。

選抜の人数につきましては作品の内容を閲覧者に公平に認知していただくため1学校で1名の作品の選抜でお願い致します。

例年展示会場の面積が限られている理由もあり、何卒ご理解をお願い申し上げます。

選抜の対象は2019年3月に卒業する学生の卒業作品を出展いただけますようお願いいたします。

今後は下記のような流れとなります。お含みおきください。

ご担当者の変更などございましたら、ご連絡いただければ幸いです。

本年度

- ・1月 : 卒業作品のお取り置きのお問い合わせ

来年度

- ・5～6月 : 作品展の会場と出展要項の詳細決定・巡回展の有無の決定
- ・6月中 : 各学校へ卒業作品展のご案内、出品登録受付の開始
- ・7月末 : 出品登録の締め切り
- ・10月初旬 : 提出作品と同様データの作品提出
- ・10月中～下旬 : 作品パネルの実際の提出・大会会場にて卒業作品展開催
- ・11月 : 学会ホームページにて卒業作品展審査結果のお知らせ

ご参考までに、昨年度の出品要項の概略をお知らせいたします。

- ・1学校あたりの壁面量は、間口(900)mm×高さ(1800)mmの縦長の壁面1枚分です。

- ・各校1名の推薦でお願い致します。

- ・応募作品は必ずパネル(貼るパネル・厚紙など軽量なもの)に貼って(筒状にせずに)提出していただきます。

※作品の展示計画と確認に使用するため、別途、作品の画像データ(JPEGまたはPDF)で、実際の提出物と同等のものをあらかじめ10月ご提出いただきます。

- ・作品の返却はいたしません。

- ・出品料はございません。

- ・送料は各自でご負担をお願いします。

あらためて6月に出展要項の詳細をご連絡する予定です。



■平成30年度支部だより

□北海道支部

支部長 小澤武 (小澤建築研究室)

今回はありません。

□東北支部

支部長 早野由美恵 (東北芸術工科大学)

今回はありません。次号第64号に支部報告を掲載予定です。

□北陸支部

支部長 棒田邦夫 (金沢学院大学)

2月10日(日)に新年会をしました。参加者は7名で、次年度4月から金沢に日本インテリア学会事務局を置くことを報告し、了承を得ました。また、私が事務局に関わっていくことで支部運営に支障をきたさないよう支部長の交代も提案させていただきました。なお、交代の時期は2020年3月に理事・評議員選挙がありますので、この選挙を機会に2020年度より新体制で北陸支部運営をお願いしていくことになりました。この間、私は北陸支部支部長と事務局の兼務をしながら新しい体制を整えていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

□関東支部

支部長 内田和彦 (株オカムラ)

今回はありません。

□東海支部

支部長 河辺伸二 (名古屋工業大学)

2018年11月11日(日)、12日(月)の2日間、東海支部「秋の見学会」を、エクシブ鳥羽別邸で開催しました。参加者は9名。エクシブ鳥羽別邸は、三重県鳥羽市街地南方の波の穏やかな入り江に臨む場所に位置し、2016年に開業した地上4階、地下2階建ての会員制リゾートホテルです。2017年ABBリーフ賞・国際インテリアデザイン部門を受賞しています。

建物のデザインは和のテイストで、ロビーラウンジなどのパブリックエリアは、土壁や和紙、石、格子等が使用され、客室は青、赤等の基調色で部屋ごとにまとまっています。中庭の日本庭園の散策もしました。

1日目夕食時の情報交換会は、参加者相互、最新のイ



エクシブ鳥羽別邸ロビーラウンジにて

ンテリアの話題に盛り上がり、有意義な時間を共有しました。

10月27日(金)に、東海支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会のリレーセミナーで、弓立順子氏(金城学院大学教授、元日建設計・日建スペースデザイン、日本インテリア学会正会員)による講演会を、OTTOプレゼンルーム1・2にて開催しました。演題は「実践のインテリアデザイン教育」です。

氏の企業時代の多数の作品の紹介の後、現在大学で学生とともに取り組んでいるさまざまな実践プロジェクトを、映像を使って講演されました。参加者は、学生を含めて46名。インテリアデザインの制作者にとって、大変有意義な講演会でした。

□関西支部

支部長 片山勢津子 (京都女子大学)

この会報が印刷される頃にはもう終わっているかもしれませんが、只今、新年のお祝いを兼ねて、講演会と懇親会の計画を進めています。講演会は、昨年秋竣工した「ファミリア神戸本店」について、設計者からお話ししていただく予定です。

また、2月には関連協会の活動に合わせて、支部の講演会を企画中です。詳細は、支部ホームページをご覧ください。他支部の方も、どうぞご参加下さい。

関西支部では、来年度の見学会についても計画を始めました。ご意見などございましたら、支部HPまでお願いいたします。

<http://jasis-kansai.jp>

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔 (近畿大学)

広島デザインデイズ2018参加

■主 催：日本商環境デザイン協会中国支部

参加団体：日本サインデザイン協会中国地区、日本インテリア学会中国四国支部、協力：広島県、大光電機

■会 期：平成30年11月17日(土)18日(日)

■会 場：イノベーション・ハブ・ひろしまCamps

■内 容：学生プレゼンテーション、学生デザインコンペ、参加団体の年間アワード映像・パネル展示

「広島デザインデイズ」は、中国地方のインテリア関連の団体、企業、大学等が、デザインを「見る、学ぶ、体験する」ことを身近に感じ、楽しく接するイベントとして毎年開催している。今回も、本学会中国四国支部がサポートする中、学生ネットワーク(名称：マンセル)の学生が準備・運営に参画した。

学生プレゼンテーションでは、昨年度に続き「平和公園の魅力をデザイン」をテーマに5校（近畿大学工学部、広島工業大学、広島女学院大学、安田女子大学、穴吹デザイン専門学校）の混成4チームが、照明やベンチなどの視点から団体会員へ向けてデザイン提案をした。団体会員からは専門的な視点から幅広く質問や励ましがあり、学生からは団体会員との交流ができ刺激を受けたとの感想が聞かれた。



写真1 学生プレゼンテーション



写真2 学生と団体会員

広島では貴重なインテリア分野のイベントとして始まったこのイベントが、インテリア業界と学生の交流を深め、さらに充実した内容で盛り上がっていくことに期待したい。

松尾兆郎

□九州支部

支部長 森永智年（九州女子大学）

今回はありません。

■平成30年度研究部会だより

□歴史研究部会

部会長 河田克博

今回の報告は、とくにありません。

□人間工学部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

会員の皆様から研究会の内容等につきましてご要望があればぜひご連絡頂きたく。また、部会の活動に関心がある方もぜひご連絡下さい。お待ちしております。（mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp）

□教育研究部会

部会長 金子裕行（千葉県立市川工業高等学校）

(1) 教育研究部会

平成30年9月1日（土）に平成30年度第2回教育研究部会を専門学校ICSカレッジオブアーツにて開催いたしました。出席は、金子、河村、高月、江川、細川の5名です。議題は①第25回卒業作品展・巡回展、②研究論文の書き方講習会についてです。巡回展は、平成30年11月14日（水）～18日（日）に開催することが決定しました。研究論文の書き方講習会については、平成31年4月もしくは5月に実現させたいとの方向で意見がまとまりました。

平成30年11月3日（土）第3回教育部会を専門学校ICSカレッジオブアーツにて開催いたしました。出席は、金子、河村、高月、江川、細川の5名です。議題は第25回卒業作品展・巡回展について、①日程及び会場の確認 ②受付係の確保 ③懇親会の内容 ④作品の搬入 ⑤会場における作品展展示計画等についてそれぞれ意見交換し、巡回展に向け準備する内容を確認しました。



写真1 巡回展の様子

(2) 日本インテリア学会第25回卒業作品展・巡回展

期日：平成30年11月14日（水）～18日（日）

12：30～17：30 最終日は16：00まで

11月17日（土）16：00～懇親会

会場：タチカワブラインド銀座スペース オッテ

5日間の来場者は約100人でしたが、作品に携わった学生の他に巡回展の看板を見て立ち寄った人も何人か見受けられました。（写真1）懇親会では、直井会長、教育研究部会関係者、巡回展を手伝ってくれた学生、大学・専門学校・高校で最優秀賞、優秀賞を受賞した学生及び指導教員が参加しました。

最優秀賞、優秀賞を受賞した学生及び指導教員から作品のプレゼンテーションをしていただき、その後、質疑応答に入りましたが、多くの質問が飛び交い、大変盛り上がりました。また、プレゼンごとに直井会長からご講評をいただき、大変有意義な会となりました。（写真2）今回の作品展示に関し、工夫した点は、作品の応募時に指導教員から作品に対する指導内容のコメントをいただき、そのコメントも作品と一緒に展示したことです。入場者のほとんどがそのコメントを読み、作品を黙々と鑑賞している姿が印象に残りました。



写真2 懇親会における作品のプレゼンテーションの様子

□期限付研究部会

部会長 西出和彦（東京大学）

インテリア空間のユニバーサルデザインの推移の考察—住まいのインテリア空間をユニバーサルデザインの視点で調査・分析—

植松暉子

我が国は現在世界一の高齢社会で平均寿命は男女共香港に次いで2位、男性80.32歳、女性は87.14歳です。しかし、いかに健康上の問題に制限されることなく活き活きと自立した日常生活をおくれる「健康寿命」は男性71.19歳女性74.21歳です。国民が健康な生活と長寿を享受出来る健康長寿社会の実現が急務となり、単に長生きするだけでなく、高齢者が身体の衰えをカバーしながらも高齢期を活き活きと快適で自立した生活が出来る高齢社会を実現して、健康寿命の延伸が目標です。そのためには、日々過ごす住まいがいかに高齢者にとって住まいやすい内部空間であるかです。期限付き研究部会の公募に「今の時代にふさわしいテーマ……」と記載されていたので応募し採択されましたテーマです。

●2017年インテリア学会大会で発表

住まいの・トイレ・玄関・扉・ドアノブ・手摺・蛇口を調査分析しました。

- ・「トイレ」の進歩は驚きである。下水道の普及で大都市の水洗便所の普及は90%以上になり洋式トイレが普及した。トイレに入る→便フタが自動で開く→用をたす→おしり洗浄→乾燥→便器洗浄→立つ→便フタ閉まる→終了。操作盤のボタンを押せばすべてしてくれる。
- ・「ドアノブ」握り型（握力がないと握りにくい）→L型・I型（操作が楽・少ない力で開閉出来る）
- ・「蛇口」握り型（握力がないと操作が難しく止めにくい）→上下レバー型（上→出る）（下→止まる）操作が楽でしっかり止まる。

●2018年インテリア学会大会で発表

築48年（1971年竣工）の千里ニュータウン14階建てマンション（85㎡～98㎡）55戸と著しい進化のみられる築9年（2009年竣工）駅直結で2階～6階まではシニア安心住宅が併設されており、医療介護サービスが受けられる。（経営は別）7階から47階はタワーマンション（45.33㎡～191.91㎡）408戸です。

築1年（2017竣工）65歳以上の方が入居出来る利用権方式の老人ホームです。高齢者の皆さんが幸せであり続けるための理想の住まい483室（34.30㎡～112.76㎡）介護居室91室。35階高齢者マンションと、3棟を実態調査・分析しました。

●調査の結果

マンションの内部空間を視覚視点と使用視点からユニ

バーサルデザインの実態調査をまとめました。

- ・ 出入口（マンション） 開放→セキュリティ方式
- ・ 廊下 →手摺の設置（高齢マンション）
- ・ 集合郵便受・前に荷物台の設置（荷物を置き取出せる）
- ・ エレベーター内・行く先ボタン表示大きく子供でも押せる位置・椅子と非常時用品の設置
- ・ 音声案内（〇階です、行く先ボタンを押して下さい、お待たせしましたなど）

手摺・入口と廊下に設置

玄関・ドアノブ・握り〇型→I型・L型（握りやすい）

段差・11cm→1cm、0cm→スペース→ 広く車椅子で出入り→熱線センサー自動スイッチ（人を感じし点灯）→椅子設置

リビング・→ドアストッパー埋込型

キッチン・ガス→IH

浴室・暖房乾燥機→物干し竿設置→浴室干→床・カラリ

床滑らなくすぐ乾く→手摺1～5箇所→段差なし

トイレ・→ウオッシュレット・タンクレストイレ

→スペース・車椅子対応・段差なし・大きい扉

防犯カメラ→エレベーター内、共用部の要所に設置

ゴミ集荷室→各階に設置

●住まいの内部空間を視覚視点と使用視点からユニバーサルデザインの推移の実態について調査・分析

- ・ 高齢社会の中、健康長寿社会の実現が急務になっており高齢者が生き活きと快適で自立した生活が出来るためには、内部空間の進化の実態を築1年、築10年築、48年のマンション、検証した。今回の調査で、築48年のマンションはなぜ住み続けているかを調査し、その理由は、各階4戸、各住戸のスペースが85㎡と97㎡と広い、洋室の床はフローリングで段差なし、玄関スペースが広い、集中冷暖房のため各住戸の冷暖房と給湯のメンテナンスは不要と言う好条件のため、共有のエレベーター、床は20年前にリフォーム済みで、各住戸内もリフォームすることにより快適な生活を送っております。

スクラップアンドビルドが当たり前のような世の中、50年前に50年先を見据えてこのマンションを作ったデベロッパーのびっくりです。

次回は

「AI（人工知能）とインテリア空間」調査・分析・提案」です。

■事務局より

白石光昭（千葉工業大学）

前号からお知らせいたしておりますが、次年度4月1日より事務局を金沢に移転します。スムーズに移転できるよう努力いたしますが、ご不便をおかけすることもあるかもしれません。その際は、何卒ご了承くださいますようよろしくお願いいたします。

なお、事務局の電話番号及びメールアドレスは変更しない予定です。また、事務局住所は詳細が決まりましたら、会報やホームページでお知らせいたします。

現在、年会費のお支払いが済んでおられない会員の皆様宛に、再度支払い依頼を送らせて頂く準備をしております。お支払いが済んでおられない会員の方は、至急振り込みをお願いいたします。

■日本インテリア学会事務局の移転について

学会時事務局を下記のように移転いたしますので、お知らせいたします。

移転開始日：平成31年4月1日

移転先：920-0941

石川県金沢市旭町1丁目25番25号

日本インテリア学会事務局

事務局担当：伊藤千佳 棒田邦夫

電話：080-2386-5652

FAX：076-262-6530

メールアドレス：jimukyoku@jasis-interior.jp

■お詫び

予定しておりました第30回日本インテリア学会大会（東京）開催報告は次号第64号に掲載いたします。

■ 編集後記

広報委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

会報第63号遅れましたが、お届けできてホッとしております。年末から年明け後にかけて公私ともに大変忙しい日々でした。その間執筆をいただいた方々の原稿チェック、確認等が遅れてしまい大変ご迷惑をおかけしました。誠に申し訳ございませんでした。広報委員会の誌面でも書きましたが、フォーマットは早急に作成する必要がありますと感じております。フォーマットを作成することで印刷代の軽減ができますし、頁数の固定化もできて発行がスピーディに行われることが考えられます。広報委員の方々と協議し合って進めていきますので、皆様のご協力よろしくお願いたします。

■日本インテリア学会会報第63号（2019. 3. 10発行）

編集者： 棒田邦夫

発行者： 直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会： 棒田邦夫（委員長）

井上貴司、小俣祐樹、清水隆宏、

西岡基夫、松尾兆郎

e-mail: k-bouda@kanazawa-gu. ac. jp

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 白石研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail: jimukyoku@jasis-interior. jp